

中学校国語科におけるグループ学習の有効性
～言語活動の充実のために～

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
116018 長谷川文彦

中学校国語科におけるグループ学習の有効性 ～言語活動の充実のために～

長谷川文彦

授業力高度化コース

要約：筆者は専門実習での経験からグループ学習は生徒が主体的に授業に取り組むので有効だと考えていた。また、現在言われている言語活動の充実においてもグループ学習は効果的だと考えた。そのため、言語活動の充実の背景から効果的な指導方法をグループ学習の一種である協同学習、バズ学習を検討し、グループ学習をいかに行えばよいのかを研究した。また、その上で、どのような取り組みを行えば言語能力を向上させることができるのかを検討した。それらのことを踏まえ、授業案を作成し、研究の成果、今後の課題へと繋げていく。

キーワード：グループ学習 言語活動の充実 伝え合う力 協同学習 バズ学習

1. はじめに

1-1. 研究の背景

私は専門実習Ⅰにおいて中学校第2学年国語「論理をとらえる モアイは語る - 地球の未来 - (安田喜憲)」(光村図書)、専門実習Ⅱにおいて中学校第3学年国語「深まる学びへ 握手 (井上ひさし)」(同図書)の授業を担当した。

その際に指導教員から「生徒が楽しいと感じる授業をするように」と指示を受け、それを目指して実習に取り組んだ。

楽しい授業には色々な形があると思うが、私は生徒にとっての楽しい授業とは生徒自身が活発な発言をして、十分な言語活動が行われる授業ではないかと考えた。

そのため、実習においては生徒が発言できるように積極的にグループ学習を取り入れてみた。その結果、実習授業の中で生徒は楽しんで主体的に授業に取り組んでいたように感じられた。

また、2012年度から実施された中学校の新学習指導要領においては言語活動の充実が述べられているが、言語活動の充実の方策の一つとして、私は実習での経験からグループ学習は有効な学習形態ではないかと思えるのである。

しかし、ただ単に授業の中にグループ学習を取り入れれば言語活動が充実するというわけではないであろう。そこで本研究では、実際にどのようにグループ学習を授業の中で取り入れることが言語活動を活発にし、有効的な学びが実現できるのかを検討する必要があると思い、このテーマを修了論文として取り組むことにした。

1-2. 研究の目的

本研究の目的は授業における言語活動の充実のために有効なグループ学習の指導方法を検討することである。そのために、先行研究を調べた上で、グループ活動を取り入れた新たに学習案を作成し、吟味することにした。

なお、言語活動の充実という観点からは、グループ活動と共にペア学習も有効的な授業形態だと考えられる。ペア学習はグループ学習と比べ、机の移動などの手間が省け、すぐに学習に取り組むことができる。しかし、ペア学習では一人の意見しか聞くことができない。それゆえ、本研究ではより多くの意見を交流することのできるグループ学習に焦点を当てて論を進めていく。

2. 言語活動の充実

2-1. 言語活動の充実の背景

平成24年度から中学校に於いても新学習指導要領が導入された。
変更点の一つに言語活動の充実が挙げられる。

言語活動の充実が言われる背景としては、PISA調査、全国学力・学習状況調査などの結果から、思考力・判断力・表現力の育成が課題となったことが考えられる。また、学校教育法（30条）における次のような記載も背景の一つであろう。「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」。ここでは、「思考力・判断力・表現力」が学力の重要な要素の一つとして提示されている。さらに新学習指導要領には「思考力・判断力・表現力」の育成のためには記録、要約、説明、論述などの言語活動が必要であり、そのため、教育活動全体で言語活動の充実を図ることの重要性が指摘されている。

つまり、言語が「知的活動（論理や思考）」「コミュニケーション」「感性・情緒」の基

盤であり、言語活動を通して言語に関する能力を育成することが、思考力・判断力・表現力の育成につながるとの指摘である。

新たな「中学校学習指導要領」の総則には、言語活動の充実について、以下のように記述されている。

教育課程編成の一般方針として

1 「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。」

同じく総則において、指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項について、以下のよう示されている。

指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として

2 (1)「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」と記載されている。

このように新学習指導要領においても思考力・判断力・表現力を育むための手立てとして言語活動の充実の必要性が指摘されている。

また、現代は知識基盤型社会の到来と言われ、グローバル化が進んでいる。そのため、こうした社会変化に対応していく能力も求められている。私の身の回りでもツイッターやフェイスブック等が普及し、日常的な取り巻く環境の変化は激しい。こうしたソーシャルメディアの急激な発達によりコミュニケーションの新しい形に対応しなくてはならなくなっている。そのためには、十分な顔と顔を合わせたコミュニケーションの能力を身につけることが重要であると考え。文字だけでなく実際に会話をし、相手の表情などを読み取ることで他者理解を深めることができる。また、様々な人と話すことで多様な考えを吸収することで人間理解を深め、それが自己理解にも繋がると思う。他者理解・自己理解を深めていくためにも言語能力の充実が不可欠であり、こうしたことが言語能力が重要視され

る背景ではなかろうか。

2-2. 言語活動の充実を図るための学習形態

私が大学四回生で初めて教育実習に行った際、筆者自身は五回程度授業を行ったが、その授業のほとんどが講義形式の授業になってしまった。そこで、単元の最後の授業でグループ活動を取り入れることを考えた。生徒に「グループの形に」と伝えたときに、ある男子生徒が「やったー」と言ったことが非常に印象に残っている。また、その際に一斉授業では見られなかった、生徒のアクティブさをグループ活動から感じる事ができた。グループ学習は生徒が楽しいと感じ、主体的に学ぶ意欲を持つのではないかと思った。

国語科の目標は学習指導要領では「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」と記載されている。ここで言う伝え合う力とは学習指導要領解説による「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力」と述べられている。

ここに指摘されている伝え合う力を高めるにはグループ学習が効果的と思われる。なぜならば、伝え合う力の第一歩が発言することだと思うが、小人数で比較的発言しやすい環境を形成し、生徒の発言機会を増やすことが可能なグループ学習の形態は有効だと考えられるからである。

しかし、ただ単にグループ学習を行えば生徒の言語能力が向上するというわけではないであろう。では、指導の際にどのようなことに注意し、配慮すれば生徒はグループ学習を通しての深い学びが可能になるのかを次章で検討したい。

その前にグループ学習の定義を次節で検討しておきたい。

3. グループ学習

3-1. グループ学習とは

グループ学習とは『教職用語辞典』（一藝社、2008 年）によると「小集団学習のこと。小中学校の教科指導は、普通一般には説話と問答を中心とする一斉授業の形態で行われる。そのような授業過程での学習者の授業参加をみると 1 時間中ほんの数人が発言したに止まる場合さえ少なくない。この点を問題視して、全員の学習参加を可能にする方法として、授業中に、数名からなる小グループでの話し合いを導入することがある。その学習形態を

グループ学習という。」と定義している。

つまり、一斉授業であれば主に「教師 - 生徒」のやり取りになってしまい、発言する生徒、発言できない生徒が出てきてしまう。発言する生徒は教師や周りの生徒に対し伝えるという行為をとれるが、発言しない生徒にとってはそれを聞くだけになってしまう。一斉授業の形態そのものが悪いということではなく、少人数のグループ活動を取り入れることによって、「生徒 - 生徒」の交流を行うことができ、一斉授業ではなかなか発言する機会のない生徒にとっても発言する機会を設けることができる、と指摘である。

また、グループ学習が導入された背景として同辞典では「グループ学習は第二次世界大戦後の日本にアメリカから入ってきた問題解決学習の学習方法として採用された。その後、一斉授業の授業形態を批判して開発された集団学習、小集団学習、バズ学習、自主協同学習などにおいて、みつける学習、まとめる学習、求める学習など学習の方法が深化し、グループ学習によって授業の効率が高まることが判明している。さらに、学習者が協力してグループ学習ができるようになることそれ自体が授業の重要な目的であると認識されなければならない。」と指摘している。

また、出口の『「グループ学習に対する教師の指導」に関する研究の動向と展望』（2003年）によるとグループ学習を取り入れる理由としては、「学習への参加度を高める」「討論による思考の深化」という学習に関するものと「人間行動・仲間意識の育成」や「向社会的行動の発達」と言った社会性の育成に関するものが挙げられている。

さらに「グループ学習は、学習面および社会性の育成という観点から、高い関心が示されている学習方法であり、今日の学校教育において重要な役割を有していると考えられる」と述べていることから、グループ学習の目的は社会性の育成、思考の深化の二つがあると指摘している。

生徒が社会性を身に付けることは大切であるが、社会性は授業場面だけでなく、生徒指導が大きな影響を与えられるので、本研究では主に思考を深めるグループ活動について検討したい。

3-2. グループ学習の指導方法

グループ学習を行う上でまず考えなくてはならないのは、その課題がグループ学習で解決すべき課題なのかということである。個別学習、一斉授業、その他の学習形態を踏まえ、「何を解決するためにグループ学習をするのか」という明確な意図を持ってグループ学習

を取り入れないと深い学びには繋がらないと思う。

また、生徒に役割分担することも大切だと思う。司会や発表者などの役割を与えることで生徒全員がグループの話し合いに参加する環境が作れると思うのである。

さらに、グループ学習に移る前に個人で考える時間を持つことも大切だと思う。なぜなら、自らの考えを持ちグループ学習に移行することでより活発な話し合いができるからである。

グループ学習の一つに協同学習が挙げられる。協同学習の定義はジョンソン&ジョンソン（1998年）によれば「スモール・グループを活用した教育方法であり、そこでは生徒たちは課題に対して一緒に取り組むことによって自分の学習と互いの学習を最大限に高めようとする」（18頁）である。協同学習の指導の流れにおいても必ず個別学習を学習プロセスの最初に設定されている。そして、共通の問題の解決を協同構成するグループ内の交流（グループ活動）へ、全体での発表を聴くことを通じての協同構成（一斉形式）へと授業展開を図るのである。その理由としては、「学習は自ら積極的に行うプロセスであり、いずれの学習者もまずは自分の視点で知識を加工しようとし、自分なりの知識モデルを描き、既有知に結び付けようとする」（ブリューニング・ザウム 2008年）という学習個別理論が根底にあるからである。学習課題に対して、各個人が十分に内発的動機づけや自己の見解を持たなければ、グループ内における知の協同構成は成功しない。他者と交流する前に自己の学習資源を持ってこそ、グループにも寄与できるし、全体でのプレゼンテーションの内容も自己に結び付けられていく。

以下の図1は上記の学習の流れを分かりやすく提示したものである。

この図からも個人の時間を取り、グループ、全体と学習を進めていくことが協同学習の流れであることがわかる。

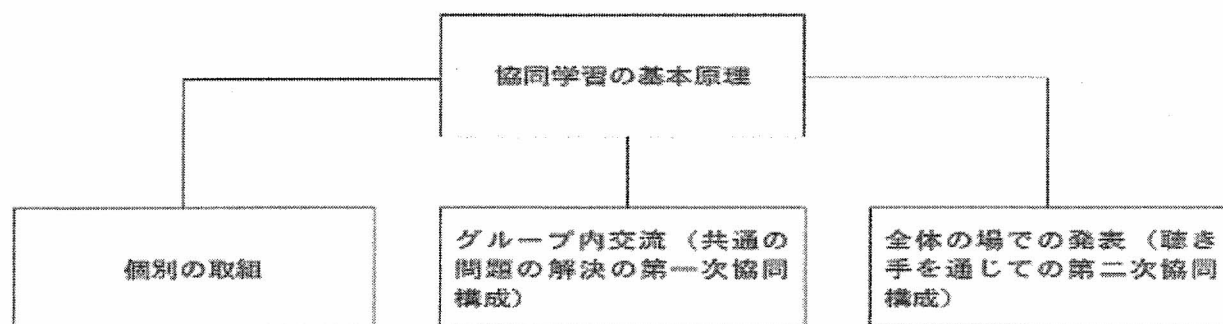


図1 協同学習の基本原則 (Brüning/Saum 2008a)

出典 <http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/jissen/pdf/1115.pdf>

また、グループ学習の一つのバズ学習であっても類似した指導方法が提唱されている。バズ学習とは児童・生徒を小グループに分けて討議させ、その結論・意見を、さらに全員で討論する学習方式である。

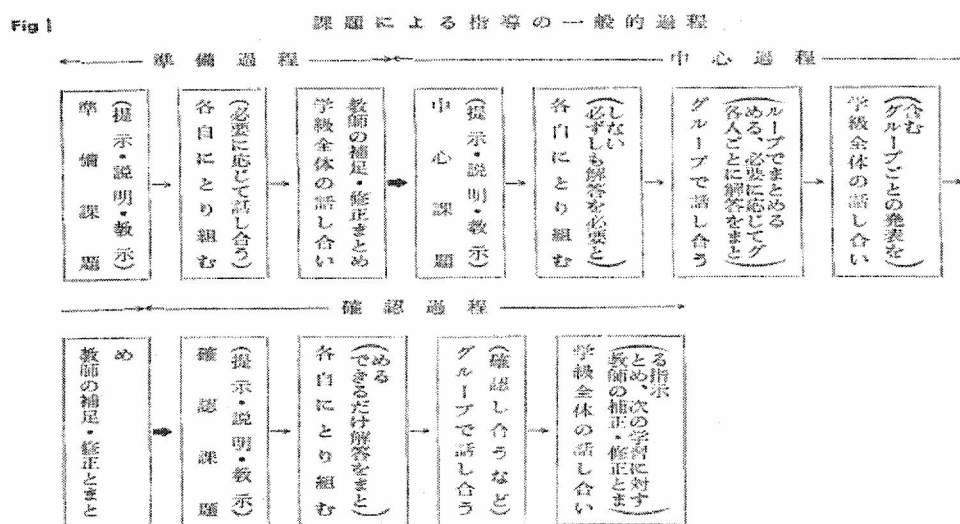


図 2 課題による指導の一般過程

出典 : http://ci.nii.ac.jp/els/110000203735.pdf?id=ART0000576728&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=type=0&lang_sw=&no=1355900859&cp=

塩田 (1968 年) による導入→展開→終結という指導の一般的過程には次のような段階が提案されている。すなわち、①準備課題：中心課題に対する準備として、既習の知識・経験の想起、調整、情報交換などを狙いとするレディネス的課題、②中心課題：その解決に積極的に取り組むことによって、理解や思想が進み、目標とされる知識や技能の獲得が期待される、③課題確認：中心課題の学習内容を要約し、確認し、応用し、次の学習への発展を狙いとする) の 3 種の課題である。こうした課題に対して、①まず各自に取り組む、②続いてグループ内での話し合い、③さらに学級全体での話し合い、④教師の補足・修正とまとめ、という過程にしたがって指導を進めていく一般的な指導 (学習) の形式が示されている。

塩田 (1968 年) は「このような課題による指導によって、生徒たちは学習すべき内容を具体的に把握し、その疑問や不明点、解決の方向や予想などをそれぞれの能力に応じて明確にすることが出来るであろう。そして、そのうえで話し合いに入ることになるので、話

し合いは充実した効果的なものとなるであろう。結果として、彼らの学習活動への積極的参加と学習効果は大いに促進されることとなるであろう。」と述べられている。(123 項)

つまり、グループ学習を取り入れる際には個人学習の時間を取ってからグループ学習に取り組むことで深い話し合いができ、全体での学習の後に教師が補足・修正を行うことでより深い学びに繋がるのである。

グループ学習の取り組みを生徒に振り返らせることによって次回への課題や、反省点、良かった点を見つけ、次回の学習ではより深いグループ学習を行うことができる。

以上をまとめるとグループ活動を取り入れる際に考えねばならないことは以下の 3 点になると思われる。

- ① グループ学習を取り入れる明確な意図を持つ
- ② 生徒に役割を与える
- ③ 授業の展開は個人→グループ→全体の流れで行う

3-3. グループ学習を通しての言語活動の充実

こうしたことを踏まえて言語活動の充実を図る上で注意すべき点を検討したい。

まず、話形指導への取り組みである。

グループ内で発言する際などに

「私は～だと思います。」

「なぜなら～だからです。」

などの形を生徒が発表する際に取り入れることによって、主張と根拠を明確にすることができる。

話し合いの場において、きちんと明確な主張と根拠を持って発表することが聞き手にも分かりやすく、言語能力の向上に繋がると考える。

もう少し複雑な話形指導としては、

「～さんの意見に賛成・反対・付け加え・質問です。」

「意見や疑問など」

のような、前の発言と関連付けるものや、

「私は～と思います。」

「理由は二つあります。一つ目は～、二つ目は～」

「だから、私は～と思います。」

のように、理由を複数言ったり、終わりにまとめの文を付け加えたりすることによって生徒の言語活動を高めることができるのではないか。

しかし、極端なパターン化になってしまうと話し合いの内容が合致していないにも関わらず無理やりに内容をくっつけてしまおうとしてしまう危険性もあるので発達段階に応じた話形指導を行う必要がある。

次に生徒の「聞く力」を高める点である。

実習でグループ学習を用いた授業を参観した際に、一人の生徒が積極的に発言していたが、周りの生徒に聞く態度が良くなかったためにその後の発言意欲を失ってしまう場面に遭遇したことがある。このことから、生徒の「話す力」と同時に「聞く力」の育成が重要であると考えた。

佐藤（2007 年）は聞く技術とは「情報を読み解く力」「他者と関わる」言語技術であると述べている。しかし、突発的にスピーチやディベートなどを行っても系統性がなく、論理的に「聞くこと」「話すこと」ができるようにはならないと思う。

価値のある内容を分かりやすく話したり、相手の話を正確に聞き取ったり、自分の立場や根拠を明らかにしながら意見を話すためには、まず論理的に「読む力」と「書く力」が必要である。「聞くこと」「話すこと」は「読むこと」「書くこと」による思考の明確化、焦点化と学習過程の中で、論理的に、豊かになっていくと考えられるからである。

そのうえでの「聞く力」の育成方策の一つとして、他の生徒が発表しているときはメモを取るように指導することは有効であろう。そうすることで生徒は発表に耳を傾け、きちんと聞く姿勢を保つことができるのではないか。

以上をまとめるとグループ活動を通して言語活動の向上に努める際に考えねばならないことは以下の2点になると思われる。

- ① 意見と根拠を明確にする話形指導
- ② 「聞く力」の育成

4 . 授業案の作成

にじの見える橋 4/5

過程	指導内容	指示・説明・発問	留意点
導入	・前時の復習	・「前回の授業ではど	・教科書、ノートを

	・本時の学習内容を提示する。 ・グループ学習のルールについて再度確認する。	のようなことをしましたか」 「少年の心情の変化をとらえよう」 ・ルール ・生徒に役割を与える ・話形の徹底 ・メモを取る	机の上に出しているかを確認する。 ・ノートに目標を書けているかを確認する。
展開	・教科書 27 ページの 8 行目から 9 行目を範読する。 ・教科書 30 ページの 6 行目から 7 行目を範読する。 ・発問を提示し個人で考える時間を取る。 ・考えた内容をグループで持ち寄り話し合いをする。	・「教科書 27 ページを開けなさい」 ・「教科書 30 ページを開けなさい」 ・「共通する言葉を見つけ線を引きなさい」 →足踏みという言葉に線を引かせる。 ・「最初の足踏みと最後の足踏みどのような変化があったと思いますか。教科書から根拠を見つけて説明しなさい」 ・「グループの形になり、役割を確認しなさい、また必要に応じてメモを取るよう	・教科書を開いているかを確認する。 ・該当部分に線を引きしているかを確認する。 ・根拠となると思う部分に線を引かせる。 ・きちんと机をグループの形にさせる。

	・それぞれの班の総意となった意見を発表させる。	にしなさい」 ・「どのように変化して、その根拠はどこであるのか、班で話し合ったことを発表者が発表しなさい」	・各班の発表者に発表させる。
まとめ	・それぞれの班の発表、授業に取り組む姿勢に対して思ったことを述べる。 ・次時の説明をする。	・「次回は自分にとってのじについて考えてもらいます。考えていてください」	・良かったこと、反省点を述べる。

今回の授業案は中学校第一学年「学びをひらく にじの見える橋（杉みきこ）」（光村図書）の五時間構成の四時間目である。本単元は生徒が中学生になり初めて学ぶ物語文である。

今回の授業案では授業の展開を個人で考える時間、グループで話し合う時間、全体で発表する時間、教師が総括する時間という流れにした。そうすることで生徒は段々と理解を深め、また他者の意見を聞くことで考えを広めることもできると考える。そして、教師がそれらの意見をまとめることによって本時の授業を深い学びへと導くことができるのではないかと考えた。そして、班での話し合いにおいては、話形指導を充実させ、活発な話し合いをさせる。話し方を生徒に提示することで、意見と根拠を相手により伝わりやすく話すことができるのではないかと考えた。

また、それぞれの生徒にグループ内で役割を与えることによって、授業に取り組む責任感を与えることができる。例えば、司会であればどうすればグループの話し合いが上手くいくのか、発表者であればどのように発表すれば聞き手に伝わるのかなどそれぞれが役割を感じることもよっても、活発なグループ学習になると考える。そして、メモを取ることで話してのポイントを押さえ、考え方を広げることができる。

5. 研究の成果と今後の課題

本研究の成果は二点あると思う。

一点目はグループ学習においての授業の流れを提示できたことである。現在、言われている言語活動の充実に向けてグループ学習は一つの有効な手段であると思われるが本論ではその指導方法を検討したことである。

二点目はグループ学習を取り入れて授業案を作成できたことである。私自身実習でグループ学習を用いた授業を何度か行ったが、形のためのグループ学習になってしまっていたように思う。それゆえ、様々な考えを授業案に取り入れ、作成してグループ学習をより有効に行う可能性を検討できた。

また、今後の課題として今回の研究がすべての生徒に当てはまるものではないと考える。そこで今後はグループ学習と関連の深い国語科における「話すこと」「聞くこと」とともに「書くこと」「読むこと」のグループ学習との関係性を研究する必要があると思う。

引用・参考文献

- ・佐藤洋一・野々山由佳（2007） 「論理的で豊かな『聞く力』『話す力』を育てる国語科授業・評価の開発 - 『水の東西』【山崎正和】を中心に - 」 愛知教育大学研究報告 56号 p p 175-183
- ・塩田芳久（1968） 「学級集団の研究Ⅴ - 課題によるバズ学習の指導 - 」 名古屋大学教育学部紀要 14号 p p 121-132
- ・ジョンソン、DW ほか 杉江修治ほか訳（1998） 『学習の輪』 二瓶社 p 18
- ・出口拓彦（2003） 「『グループ学習に対する教師の指導』に関する研究の動向と展望」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 50号 p p 175-183
- ・原聡介（2008） 『教職用語辞典』 一藝社
- ・原田信之（2009） 「学びの共同体づくりの授業技法としての協同学習」 岐阜大学教育学部研究報告・教育実践研究 11号, p p 217-224
- ・森山卓郎・達富洋二（2010）『国語教育の新常識 - これだけは教えたい国語力 - 』 明治図書
- ・文部科学省（2004） これからの時代に求められる国語力について
- ・文部科学省（2011） 言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】
- ・文部科学省（2008） 中学校学習指導要領解説国語編